1-2

考古学の多様性と縄文住居復元

ジョン・アートル

最初に、私が文化人類学から日本の考古学に入り込んだきっかけについて話をしたいと思います。学部の時も、博士課程の時も、私の指導教員の先生は日本の考古学を研究していました。学部の時はネブラスカ大学のピーター・ブリード先生、博士課程の時はカリフォルニア大学バークレー校の羽生淳子先生のもとで勉強していました。その間は考古学のことはほとんど無視していましたが、博士課程の時に能登半島の鹿西町で文化人類学的な調査をしていて、**弥生時代の 2000 年前のおにぎり化石**にちなんで、おにぎりの里の名前でまちづくりをしている事例に出会いました。自分のフィールドの中で考古学が地域振興に利用されているのに気がついて、改めて関心を持ちました。

文化人類学から考古学を見るというのはどういうことか、説明します。文化人類学が調査しているのは、世界中の文化や人々の「知」のシステム、知識をどうやって作っているか、世界をどうやって見ているかです。そのうち異郷の他者だけではなく、自分たちはどうやって知識を作っているかも見るようになっている。今日、高田さんが『縄文遺跡の復原』をくれたのはとてもありがたい。なぜかというと、考古学を説明する時、何かの結果を説明する時にスタートを作って、きれいな話をつくってこういう結果になりました、としますが、私から見ると綺麗にスタートから結果には展開しない。その間に揺れや喧嘩、揉めるところがたくさんあることに注目したい。だから、こういう本では、実際どういう話があったか、意見が統一している訳ではない中でどのように解決していったかがよくわかるし、そこに私の関心もあります。

今日は例として、**桜町遺跡**の高床建物の復元（Fig. 1.2.1）、御所野遺跡の復元、この二つを見たい。住居の復元を見ると、様々形はありますが、よく見ると高田さんがお話したとおり、ほとんど茅葺にしている。御所野が土葺きにしたこ

＊下部にある註は吉田泰幸による

弥生時代の 2000 年前のおにぎり化石　杉谷チャノバタケ遺跡で出土した炭化米の塊。正確にはちまき状の形状であったが、「おにぎり化石」というキャッチフレーズが先行してまちづくり活動にも取り入れられた。

Fig. 1. 2. 1 桜町遺跡の復元高床建物

とで、土葺きも少しありますが、ほぼ茅葺です。住居の復元を調べようと思ったきっかけとして、三つの素朴な疑問がありました。一つは、復元と周りの環境は綺麗すぎるのでは、という疑問です。コンクリートの階段・散歩道を作ったり、綺麗な草花を植えたりする。これは縄文を正しく表してはいないのではないか。二つ目は、**三内丸山遺跡のロングハウス**が典型ですが、復元する時にはしばしば、一番大きいもの、特徴的なものを復元する。そして三つ目は、茅葺にしてしまうと、日本の江戸時代や近現代の民家にそっくりになってしまう。これについて羽生先生と話をすると、ナショナリズムと関係しているのではないか、現代の人たちと先史・古代の人たちを意識的に、あるいは無意識的に結びつけるためではないか、と彼女の説明は落ち着きますが、私はそれでは説明としては不十分ではないかと思い、研究し始めました。桜町の高床建物も白川郷の合掌作りの建物に似てきてしまう。これが面白くて、何故だろう、という疑問が出発点です。

こうした復元をみてみると、復元というのは縄文時代の多様性を表象するためにあるのと、復元に関わる考古学のプロセスをみることで、英語圏における日本考古学についてのイメージとは異なり、日本考古学は実際には多様で複雑なことが示せるのでは、と思いました。私の研究方法は Ethnography of Diversity of Japanese Archaeological Practices と名付けていて、日本考古学の多様な実践についての人類学的研究です。英語圏の中で日本の考古学を説明する時は、大まかに言って**三つの特徴があります**。第一はナショナリズムとの関係という枠組みで説明することが多い。日本の考古学は日本の単一民族神話を作り上げるために使われているという言い方が一つの例です。二つ目は、日本の考古学は多様性のない学問とされることが多い。例えば同じような研究方法、土器の

桜町遺跡　富山県小矢部市の縄文中期～晩期の遺跡。遺跡公園には高床建物の復元の他、北陸地方の縄文晩期に特徴的な環状木柱列の復元もある。

三内丸山遺跡のロングハウス　三内丸山遺跡公園の中で、六本柱の復元建物に隣接して復元されている長方形の平面プランを持つ大型住居。

型式学ばかりやっているという描き方が多い。三つ目は、それとは矛盾しますが考古学的調査が進んでいることで多様性も明らかになってきている、とも言われている。私はこれでは不十分だと思っています。

私が提案したい研究モデルというのは多様性をメインのキーワードとして、三つのことをみています。一つは Interpretive Diversity、解釈の多様性や解釈する方法の多様性です。現地説明会、報告書、資料館の展示・復元における解釈の多様性を見るべきではないか。二つ目は Data Diversity、データの多様性です。いろんな科学や技術が進んで行くことによって、考古学の知識は様々なところから取り上げられて、また反対に考古学に入り込むことがある。例えば AMS や LiDAR などの技術を取り入れるときに、様々な衝突がある中で、どうやって利用していくのかに難しさが出てくる。最後は Diversity of Actors で、**アクター**に着目する。考古学は考古学者だけで作っていくわけではない。様々な人や組織が絡み合って、考古学的な知識が生まれることに注目したい。例えば、遺跡公園に遊びにくる子供達や地元のガイドも大切なアクターです。

遺跡での発掘調査の風景を見ると、調査に参加している人がいる。この人たちはもちろんアクターで、普通の見方としてはこの人たちは様々なバックグラウンドがあり、やっていることも様々なことに着目して、彼らがどのように考古学をやっているのかを見るのですが、それに加えて **Objects・モノ、物質もアクターとしてみる**。人間がモノに語らせる、意味を持たせるというのが通常の見方ですが、モノ自体が人を動かすことにも注目したい。先行研究でも、参加者の多様性は様々な人が指摘し、研究しています。例えばパブリックアーケオロジーからは Multivocality（**多声性**）や、日本語にもなっているステークホルダーという概念も出てきていますが、そこには限界もあると思う。さきほ

三つの特徴があります　主に以下の文献において、ナショナリズムとの関係、編年研究をもとにした文化史研究偏重、独自に発達した緊急発掘調査システムによる調査の大規模化とそれに伴う発見の増加、という 3 つの特徴が指摘されている。Fawcett 1995・1996, Habu and Fawcett 1999・2008, Ikawa-Smith 1982・1999, Kaner 1996

AMS　放射性炭素年代測定法のうち、加速質量分析、Accelerator Mass Spectrometry の頭文字をとったもの。放射性炭素年代測定は C14 の放射性壊変で放出される β 線を計測する方法が先行し、のちに C14 原子を直接数える AMS が導入された。非常に微量のサンプルで計測が可能となったため、考古学的資料の年代測定研究に影響を与えた。

LiDAR　ライダー。Light Detection and Ranging の略。空中からのレーザースキャンによって地形を探査する装置。代表的な応用例として、日本の古墳の測量への適用や、カンボジアのアンコール遺跡群における未知の都市構造の発見がある。

アクター　アートルは主としてブルーノ・ラトゥールの ANT (Actor Networking Theory) に依拠してこの概念を使用している（Latour 1987、ラトゥール , 川崎・高田訳 1999）。

どの話と関連しますが、一番有名な遺跡が話題になる一方で、考古学の日常の実践はなかなか見ていない。また、結果を見て批判するだけで、どうしてその結果になったかのプロセスへの注目があまりない。社会的影響や個人の個性に着目しますが、そのことによって、遺物やモノに注目しなくなる。私がアクターという語を使うのは、ひとつのメタファーでもあります。アクターを演技者と考えると、考古学に関係している人は何かの Role（役割）を持っている。人には個人差がありますが、自由に振る舞えるわけではなくて、役割の中の期待を果たそうとする側面もある。考古学のプロジェクトの中で、どのようなアクターが入り込むのかを見たい。

次に Logic and Limitation of Reconstruction、復元のロジックと限界に注目したい。縄文時代の竪穴住居のデータはどういうものかというと、まず遺跡を縄文遺跡と判断するには、土器の型式学から決定され、さらに住居の中で、残っているものはほとんどなく、柱の穴ぐらいです。私が問題にしているのは、例えば盛岡市の遺跡の学び館にも屋外展示として復元住居がありますが、発掘した後は「これです」の「これ」はどうやって「です」になるのか。復元についての批判はたくさんあります。まずデータとの食い違い、間違いはあるし、ナショナリズムが影響を与えているのではないかという批判もあるし、復元すること自体が無責任で、十分にデータがない中で復元するのがよくないという議論もある。三内丸山遺跡の 10 何メートルの柱もよく批判されます。また、復元するときにその遺跡のデータをもとにするのではなく、周りの復元を見て真似することも多い。実際に出て来たデータを検討せずに復元してしまう。復元は時間が限られているものでもあります。例えば文化庁から予算が来たとしても、それは 1 年以内に執行しないといけない。**吉野ヶ里遺跡**の復元住居の中は照明を入れたり、コンクリートの床にしたり、柱を綺麗にカンナで柱を削ったり、現代の技術を使っているのは批判できるところです。

では、データがないところから復元まで、そのギャップを埋めて行くにはど

Objects・モノ、物質もアクターとしてみる　モノに Agency（行為主体性）を認める議論、認知心理学におけるアフォーダンス理論にも同様の概念がある。モノが主体性を持つという議論は人類学（床呂·河合 2011）や認知考古学（Malafouris 2013）でも盛んである。

Multivocality（多声性）　考古学に関わる多様な人々の声を尊重し、それらの考古学的言説の関わりを促すもの。プロセス考古学の論理実証主義への絶対的信頼に対する疑義も問題意識に含むポスト・プロセス考古学の中で生まれて来た概念（Hodder 1999 など）。

吉野ヶ里遺跡　佐賀県神埼郡吉野ヶ里町と神埼市にまたがる弥生時代の環濠集落遺跡で、国の特別史跡。この遺跡公園にも多くの復元住居がある。吉野ヶ里遺跡公園の構築過程とそれにまつわる言説構造については、Mizoguchi 2006 の Chapter 1: Archaeology in the contemporary world に詳しい。

うするのか。いろんな方法があります。第一に遺構をもとにするのは当然で、同じ遺跡での他の住居のデータ、あるいは他の遺跡のデータを利用する。建築方法としての妥当性、梁の高さをどうするかは人間の頭がぶつからないように、あるいは背の高さである程度決まり、クリの木であればどのくらいの重さに耐えられるか、穴の中に入っていた土の土圧からどのくらいの重さのものがのっていたかなども方法の一つです。建築の歴史、御所野遺跡の場合では民俗学を利用して、木を結びつける縄について聞き取り調査をして、最近までは木の皮を利用していたことを元に復元しています。その他、北米ネイティブアメリカンの昔の住居を参照するなど、ギャップを埋めるアプローチはたくさんあります。復元のアプローチも複数あります。北陸の環状木柱列はその一例です。**チカモリ遺跡**では高さはわからないので短いものにして、柱だけです。桜町遺跡では穴を開けた部材が出てきたので建物として復元しています。真脇遺跡では柱の直径から最大限の高さはどのくらいかという視点で復元している。

桜町遺跡の事例です。まず桜町遺跡は英語でいうと Waterlogged site、低湿地の遺跡で道路工事の関係で発掘調査された遺跡です。この遺跡での重要人物は宮本長二郎です。現地説明会で遺物をみた時から、ここにあった建物は祭殿ではないかと判断していました。宮本さんは先史建築の第一人者で、奈良文化財研究所、文化庁、東京文化財研究所、いろんなところで復元プロジェクトに参加しています。吉野ヶ里にも参加していたとのことです。彼のメインの研究としては先史建築のタイポロジーを確立しようとしている。この図（Fig. 1.2.2）がそれを象徴しています。いろんなタイプの建物があって、あるタイプの建物がいつからいつまで続いたかを研究している。なぜ桜町で祭殿風になったかというと、木柱列の近くにこの建物があったという遺跡の中のコンテクストがまずあり、加工された木が使われていたというのは特別な建物だったのではないかということ、そして他の縄文時代の遺跡には類例がないが、中国の**河姆渡文化**の遺跡に似たような加工がされた木があり、縄文時代にもそれが伝わってきているとした。弥生時代の吉野ヶ里遺跡の東祭殿も参照している。桜町よりも古い河姆渡との技術における類似と、桜町よりも新しい吉野ヶ里の信仰の機能、両方を当てはめて桜町も解釈した。桜町に一つの事例しかなくても、「大型高床建物」というひとつの型式を設定するのも宮本さんの特徴です。建物の上の

チカモリ遺跡　金沢市チカモリ遺跡。環状木柱列や方形の柱列がコンクリートで復元されている。その高さは、環状木柱列と方形の柱列では異なっている。

河姆渡文化　現在の浙江省東部、長江下流域に成立した 5,000 ～ 4,500BC 頃の新石器時代文化。河姆渡遺跡の名を冠して河姆渡文化という。

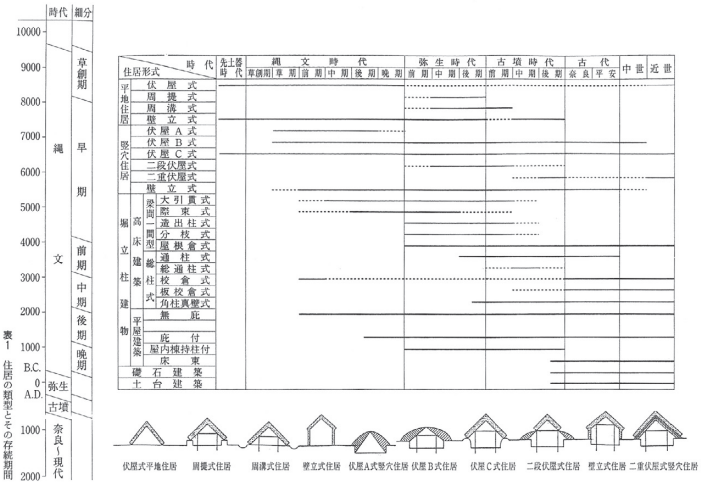

Fig. 1. 2. 2 宮本長二郎による建築の Typology と Chronology（浅川編 1998）

部分を高床にするか、屋根をどうするかは、上野幸夫という富山の国際職藝学院の人が**大きく影響している**。高床復元建物が伊勢神宮、五箇山に似ているのは、彼らが合掌作りの屋根の作り方を復元に協力してもらった学生に教えたくて、このようにしたという話です。

御所野遺跡公園の現状（Fig. 1.2.3）は、高田さんが話したとおり実験考古学の成果です。高田さんをアクターとしてみると面白い。高田さんはまずは現地の考古学者ですが、明治大学では人文地理学を専攻していた。一戸で生まれ育って、一戸の役場では 30 年以上仕事をして、遺跡の担当もしながら他の仕事も同時にしていた。一戸の色々な遺跡の発掘調査もして、現在は御所野縄文公園で仕事をしている。つまりバイオグラフィーを見ると、考古学者であり、住民であり、公務員、役場の人でもあり、いくつかのアクターを行ったり来たりしている。高田さんの実験考古学は、当然のことながら、より縄文時代らしく、本物らしくするのが一つの目標ですが、私が大切だと思うのは、実験をすることによって、他の遺跡でも役に立つように先史建築に関する一般化したデータを作っていこうとしていることです。復元は目的ではなく、そこが研究の出発点というのも興味深く、15 年以上も実験考古学的研究が続いている。

大きく影響している　1999 年 7 月 2 日読売新聞の「縄文からのメッセージ第 3 部 4」に上野幸夫氏が関わった詳細が記されている。Fujii and Ertl eds. 2013 の Chapter 1: Archaeological Diversity and Jomon Dwelling Reconstructions 参照。

Fig. 1. 2. 3 御所野縄文公園

御所野に関するアクターは、第一は遺跡自体です。また、発見と保存活動の段階に入ると、たくさんのアクターが見えます。道路を作ったことで遺跡の存在がはっきりしたので、国土交通省もアクターと考えられる。一戸の子供達もアクターです。他の遺跡を調査していた時に、一戸の子供達が土器を持ってきて御所野の存在を知らせたそうです。他にも土地を持っていた人、岩手日報、教育委員会の人が入ってきて保存運動が始まる。吉野ヶ里遺跡もアクターだと思う。吉野ヶ里遺跡も保存するかどうかで議論があった遺跡で、御所野に影響を与えた存在と言える。さらに実験をしたことで様々なアクターを呼び込むことになった。アクターの中で民族建築学の浅川滋男さんも重要です。宮本さんと違って、浅川さんは民族学からの参照が多い。そこから新しい提案が出された。それによって縄文時代の住居の新しいイメージが生まれたのではないか。

実際に住居を復元すると十何人も参加するとのことです。雨が降って雨漏りすると復元の仕方を調整したりする。2013 年に私が訪れた時も、どんどん人が関係して調査が継続されていることもよくわかった。10 年経った今は住居を解体する予定です。土はどう変化したかを、トレンチを入れ、層位を見て調査している。ビジターが来てガイドさんが説明したりします。週に三回、ボランティアが火を炊いたりして住居の状態を維持している。総括の報告書を作るために、いろんな人が調査を続けている。例えば岡村道雄さんが調査に来たりしている。世界遺産にするための運動でも、2013 年 7 月には ICOMOS と ICOM の人、それに加えてメディア・新聞の人、シンポジウムでは一戸の人にも来てもらうようにして、250 人くらいを集めました。新しいアクターが入ることでプロジェクトの形も変わり、プロジェクトはさらに新しいアクターを取り入れている。考古学は簡単なプロセスではなく、様々な人が入り込んでくる。そのことで縄文時代の多様性は明らかになってくる。

ICOMOS International Council on Monuments and Sites：国際記念物遺跡会議の略。文化遺産保護に関わる国際的な非政府組織（NGO）で、ユネスコの諮問機関として世界遺産登録の審査に関わる。

ICOM International Council of Museums：国際博物館会議の略称。博物館に関わる国際的な非政府組織。

考察としては、復元の過程を調査すると、縄文時代の多様性も見えてくるし、日本の考古学の実践の多様性も明らかになってくるのが重要だと思うところです。私には復元の妥当性は判断できない。私の研究にとっては、その妥当性はあまり大切な部分ではないが、宮本さんと高田さん、共通点はあって、二人とも出てきたものを真剣に表象する。よりいいものを作ろうとしている点がまず共通している。二人は復元を利用して、縄文時代の多様性をみせようとしている。二人とも「多様性」という言葉を文章で使います。宮本さんは縄文時代の建物の型式学をとおして多様性を見せようとしている。高田さんは私の解釈としては、住居の地域性、それぞれの遺構の個性に着目しているように見える。**「そろそろ調査に基づいた遺跡によって特徴のある、それこそ縄文的な個性のある住居が広まってもいいような気がします」**という発言もあって、縄文の個性というのは多様性だと解釈しているように見える。科学的論争をどのように解消するか、例えば縄文時代の住居の屋根は茅葺か土葺か、という問題も、御所野の事例で終わるわけではない。考古学には終わりがない。知識で全部わかることは決してない。考古学はプロセスでしかない。新しいプロセスでデータが増えることで解決するわけではなく、いろんなソリューションが提案される複雑さでもあるし、いろんな技術が入って来たことで会話のずれなども生じるので、コミュニケーションがより大切になってきている。

最後に、人類学者が考古学者や縄文時代の多様性を調べたいというのは、Homogeneization、つまり同質的な物語を作ることに対して居心地が悪い、それとは異なるものを見たいというのが根底にあります。つまり、**私が日本の多様性を見たい**ことと繋がっているのではないかと思っています。

「そろそろ調査に基づいた遺跡によって特徴のある、それこそ縄文的な個性のある住居が広まってもいいような気がします」 高田 1998 に対するコメント、さらにそれに対する高田氏のリコメント（『人類誌集報』1998 の 145 頁）の中にこのような発言がある。

私が日本の多様性を見たい その成果の一端は Ertl et al. eds. 2015 に詳しい。